

2023年ホームカミングディ市民公開講座 「最早期の記憶と人生のテーマ」

総合保健体育科学センター
保健管理室 精神科 特任教授 小川豊昭

最早期の記憶は、夢と同じように構成されて心の中に残っているが、それはその人の在り方の基盤として一生の間作用し続ける。今回の参加型セミナーでは、参加者全員にそれぞれの最早期の記憶を聞いて、それについて参加者が連想を述べ、その記憶がその人の人生をどのように導いてきたかを見ていくという作業を行った。

あらかじめ具体例として、私自身が以前に指導した発展途上国精神科医たちの例を紹介した。私は、彼らのグループに対して精神医学の教育をして、その一環として彼らの最早期の記憶を尋ねた。ある南米出身の女医さんは、最早期の記憶として、2、3歳のころのことで、「母親が泣き叫んでいる。生まれたばかりの弟が病死したから。」というものであった。その場面が強烈に記憶に残っているのであった。その後彼女は、医師となり同国の保健省に勤務し、現在は、国の児童の保健衛生管理を担当している。同様の例として、アフリカ出身の男性医師では、最早期の記憶としてやはり3、4歳のころの場面として「父親が母親を殴り母親が泣き叫んでいる」というものがあつた。この父親はアルコール中毒であつた。そして同様に彼は同国で厚生省のアルコール対策の担当をしていた。このように幼少期のトラウマのその人の人生は直接連動していることがわかる。トラウマの場合は、その人の人生に強い影響を与えることは知られているが、本人も気が付かないような微細な影響も、最早期の記憶を探ることで知ることができる。

このセミナーには、参加者が8人いて、名大出身の教授が二人と名大出身の医師が1人、名大の事務職員1名、地域の方が4人であつた。各人がそれぞれ最早期の記憶とそこから連想することや幼少期の思い出、また自分自身の人生などを語り、それについて、参加者が感想や連想を語った。この体験は、お互いに深く理解しあつたという実感をもたらしつた。

一人の先生は、最早期の記憶として、3、4歳のころ、「母親のスカートの中に入って隠れていた」という記憶を語つた。彼は、後妻の長男として生まれ、母親と特別に強いきずなで結ばれていたことがわかる。彼は、母親のために先妻の子供たちよりも立派にならなくてはならないという使命を帯びて成長したことがうかがわれた。参加者にも彼の特別なポジションが、重荷にもなるが励みにもなつたことが理解された。

別の男性は、「父親と一緒に列車を見つめ、誇らしい気持ちであつた」という幼い時の思い出を語つた。彼は国

鉄職員であつた父親を誇りに思い、父親のようになりたいと思つて育つたのであろう。ただ、学歴のなかつた父親が悔しい思いをしていたことも彼の心の傷となつていたようである。その後、彼は組織の中で出世し、さらに彼の子供は同じ組織でさらに出世している。これも同じ思いが世代を超えて作用し続けている例である。

ほかの参加者も同様に最早期の記憶を語り、自分のこれまでの人生を語り、参加者はその結びつきを実感することができた。

参加者の一人、尾関先生は、内科医であるが10年以上にわたつて名大医学部大学院ベーシックトレーニング「医師患者関係の無意識の理解」の共同主催者である。今回も尾関先生に参加していただき、グループの無意識の動きに対して共同リーダーの役割を務めていただいた。尾関先生の感想としても「参加者の問題意識が高く、積極的な交流ができて実りの多い会であつたと思う。」とのことであつた。